

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



1月24日、プレゼンテーションにて

「くまモン」の生みの親でもある小山薫堂氏が、生駒芳子氏(フアッション・ジャーナリスト)・アート・プロデューサー)・下川一哉氏(意匠・匠研究所)らをサポート。メンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年度、レクサスギヤラリー高輪で行われたキックオフセッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。1月24日、東京ミッドタウン日比谷内外の百貨店・セレクトショップ・バイヤー・メディア・デザイン関係者などに向

# レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



プレゼン中の佐藤さん

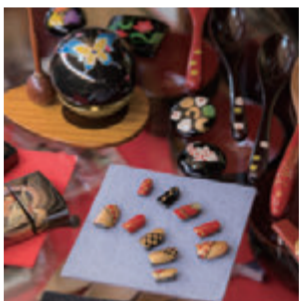
けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠へ世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMA PAVKRI エイティブディレクター)、森永邦彦氏(CANALAGE 代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。「伝統を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながらその魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。新潟県選出の匠、佐藤裕美さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

# 誰も見たことのない美を創造 杯の中の美しい小宇宙に酔う

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)

は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりの匠に挑む「匠」を応援する。

伝統と歴史を  
未来につなげたい



時絵技術をいかしたネイルチップ

1980(昭和55)年、国の伝統的工芸品に指定された新潟・白根仏壇。その起りは古く、江戸時代中期に寺院専門の宮大工である伽藍がらん師が京形の白木仏壇を作り、彫刻を施したのが始まりとされる。佐藤さんは新潟市で江戸時代後期から続く「林仏壇店」に生まれた。5代目の父芳弘さんは塗箔師、母の由利子さんと佐藤さんは時絵師。3人は伝統工芸士として新潟・白根仏壇の伝統技術を守り伝えてきた。「小さい頃から両親の姿を見てきた。伝統工芸士の道を進むのは自然な流れでした」と、振り返る。一方でイラストレーターの顔も持つ。昔から絵を描くのが好き。父の名刺の似顔絵も私の作品です。親子向けのアートイベントや講師活動なども精力的に行い、店内にはグッズも並ぶ。時絵師として、イラストレーターとして充実の日々を過ごしていたある日、



工房を訪ねた下川一哉氏と佐藤さん

LEXUS NEW TAKUMI PROJECTを知る。「以前から自分のプロダクトを第三者から評価してもらいたいという思いがありました。ただ、次女を産んだばかりで参加をためらっていたのです。そんな私

を見た11歳の娘が『お母さん、やりたいんでしょ?』背中を押してくれた。新たな挑戦をすすめるのは今しかない」と思った瞬間だった。これまでに制作してきたプロダクトを見直し、仏壇制作の時絵技術を生かした作品を世に問うことを決意した。伝統工芸という制約の多い世界で、時に息苦しさも感じてきた。本プロジェクトに参加することで、伝統工芸の世界に風穴が開くかもしれない。新潟・白根仏壇300年の伝統を背負う挑戦でもあった。

仏壇制作の時絵技術を駆使し、ネイルチップ(つけ爪)を本プロジェクトに応募した。「妹のネイルサロンで好評だったし、時絵のネイルチップは誰にも作れないだろうと思いましたが、しかしキックオフセッションで注目されたのは、他の作品も見てもらいたいという気持ちで一緒に持って行った時絵を施したタンブラーだった。既成のタンブラーに新潟を象徴する朱鷲、錦鯉を描いた作品はオリジナリティに欠けるのではな



発表会でユーザーと会話する



匠が愛用する道具。繊細な時絵の技法には伝統的な道具がよく似合う

# 殻を破る「匠」で見えてきた新しい地平

佐藤 裕美  
新潟/時絵作家



エリア・コンサルティング中の佐藤さんと下川氏。タンブラーや皿などを一つ一つ見てもらう

いか」と戸惑った。一方で強い自負もあった。「時絵の焼き付けは父と試行錯誤してたどり着いた技術に強く洗っても剥がれない時絵は日常に使う器に適している。相反する思いに揺れる佐藤さんは下川氏が「写実的な絵柄ではなく幾何学模様などのデザインにしてみたらどうか」「光沢の強いものではない方がいいのではないかとアドバイス。早速、新たなタンブラーを制作してくれる工場探しと、新たなデザインに取り掛かる。知り合いのついで見つかったのは、1926(大正15)年創業のササゲ工業(長岡市)。テレビドラマ「下町ロケット」で注目を集めたものづくりの街・燕市にルーツを持つ会社である。ステンレスでありながら一見焼き物のように見えるタンブラーを制作してくれた。「外部のクリエイターに、自分が望む作品の制作を依頼したのは初めての経験でした」。エリア・コンサルティングのため匠の工房を訪れた下川氏は、市松模様などが描かれた試作品のタンブラーよりも、遊び心で作ったおちょこの方に注目を



完成プロダクト「宙COCORO(そらごころ)」



佐藤 裕美  
新潟/白根仏壇 伝統工芸士

江戸後期から続く林佛壇店の6代目。父:塗りの伝統工芸士 母:時絵の伝統工芸士に指導を受け、2015年に新潟・白根仏壇 時絵部門の伝統工芸士資格取得。大阪の伝統工芸品と毎年コラボ作品を制作。新潟のふるさと納税商品のタンブラーや、富山県の大手仏具メーカーの仏具に、焼き付け技法で時絵を担当。他、FUNKIST(バンド)とのコラボや、店舗の内・外・シャッター装飾、親子向けイベントや講師なども手がける。



受け止めた佐藤さんは、生き生きと動き出す。使い手が自由にイメージを広げられるよう抽象的な文様を模索し、壮大な自然をテーマにしようと思いつく。さらに、さくら、つばき、つまようじなど従来の時絵では使われない道具を取り取り、漆と金粉で数えきれないほどの時絵を施した。そうしてたどり着いたのが「宙COCORO(そらごころ)」である。2枚のステンレス板を口回りで溶接した2ピース構造のおちょこは、特殊加工によって赤や青、紫などに変化する一点もの。内側には小宇宙が描かれ、お酒を注ぐと輝く。無限に広がる宇宙。その中で輝きを放つ星は、伝統工芸の世界で新たな才能を開花させた佐藤さんの姿に重なる。「実家の仏壇店の屋号は「惣」。文字を分解すると『物』の下に『心』がある。ここから、伝統×革新の「モノココロ」シリーズを展開しようと思います」と笑顔で語る。いくつもの偶発的な出会いから生まれたプロダクトは、新潟のアートシーンを刺激するはずだ。匠の挑戦はこれからも続いていく。